第３回交通政策審議会航空分科会技術・安全部会

日 時：平成２６年７月９日（水）１４：００～１６：００
場 所：中央合同庁舎３号館 １１階 特別会議室

議事概要：

＜「資料１：航空安全プログラム実施計画について」「資料２：平成 26 年度　航空安全プログラム実施計画（案）」「資料３：平成 26 年度の国の安全目標値」のご意見・ご指摘＞
〇目標に対して比較すべき実績値を直近５年間の平均とすると、仮に平成２６年度の事故件数が例年より多い場合、平成２７年度の目標値が上がってしまう。単年度の目標値が乱高下することのないよう、直近の実績を反映しない単一の目標を設定してはいかがか。

〇死亡事故の件数について、もし不幸なことに起きてしまった場合、その翌年の目標値はゼロでなくなってしまう。

〇万が一事故等があった場合は過去の実績の数字が変動するので、過去の実績に左右されない単年度ごとに設定する目標も必要ではないか。

〇安全に関してゼロにしなければならないというのは、労働災害等の面でも、目標を掲げるときには常に第一に来るように思う。安全指標だが、死亡事故発生率や全損事故発生率が、レベルとしては第一に来て、事故発生率や重大インシデント発生率等は、この達成に向け意識していくというような、レベル分けがあっても良いのではないか。

〇一般的に、海外などの安全ランキングや安全指標には、死亡者数が用いられている。発生率を用いようとする国の安全目標値の設定とは温度差があるのではないか。

〇初めての案件であるので、目標値に関してはどんどん改良しながらやっていくということで、これを実施して頂きたい。

〇本邦の航空会社の航空機に限らず、日本の管制下での事故や重大インシデントについて分析していくことに意義があるのではないか。

〇もう少し詳しく分析しようとすると、運航区分ごとに加え、場所・原因別にするなどの指標の出し方もあると思う。

〇目標値の設定を継続するに当たっては、実現可能性を考慮するというのは非常に大事なことだと思う。

〇平成２６年の目標は直近５年間の７％減とすることから始めては駄目なのか。今年何かあった場合には、来年度の目標で議論すれば良い。今の案で良いのではないか。

（以下、航空局発言）
〇目標は安定した方がよく、過去５年を平均することにより、安定を図っているところ。

〇安全目標にどういう数字を使ってどういう指標を使うか、世界中で模索しているところ。日本としては、政策評価に合ったような形で設定してみて、ＰＤＣＡサイクルを回しながら、目標値の妥当性やもう少し細かい指標について検討していくことを考えている。

＜「資料４－１：乗員政策等検討合同小委員会　とりまとめ」「資料４－２：乗員政策等検討合同小委員会　とりまとめ　参考資料」のご意見・ご指摘＞
〇昔ほどパイロットへの憧れもなくなっており、パイロットになりたいという若者が少なくなっているので、キャンペーン・教育といった若者への啓蒙が大事である。

〇我が国では外国ほど航空事業の裾野の広がりが少なく、パイロットを目指しても、空を飛ぶ仕事ができないというリスクが大きいことがあるのではないか。事業の裾野を広げる活動も併せてお願いしたい。

〇大学の教員には、パイロットや整備士といった職業人を育てるのではないという意識を持っている人もいるが、実際は、卒業生はそういった職業に就きたいと思っている人も多く、ギャップが生じているので、大学側の意識改革も必要ではないか。

〇施策の効果がどうだったか、フォローアップを継続的に実施すべき。

＜「資料５：航空安全情報自発報告制度（ＶＯＩＣＥＳ）の運用の開始について」のご意見・ご指摘＞
〇再発防止としての義務報告に対し、予防的対策としての自発報告は、安全目標値を下げることにも役立ち、非常にすばらしいことと思う。

〇自発報告制度を有効にするためには、秘匿性、公平性、貢献性、フィードバック、簡易性、情宣性という条件があるが、今回の制度はすべての条件が含まれているので、非常にいいと思う。

〇運航・管制、整備・空港の３つの分野ごとに分析を行うこととなっているが、場合によってはすべてが絡んでくる可能性があるので、必要に応じて３つの分野が合同でやるということも必要ではないか。

〇航空安全のために自発的なリポート・意見を行うことが評価される、正義であるというような文化の醸成が必要であると思う。

〇周知・広報がデータを集めるため非常に重要だと思う。今回、交通管制部も一プロバイダとなるので、交通管制部内でも広報して頂きたい。

〇ＶＯＩＣＥＳは大変良い略語だと思うが、航空でやっているということが少し分かるために、「Ａｉｒ」「Ａｖｉａｔｉｏｎ」などを入れた方がはっきりすると思う。

＜全体を通してのご意見・ご指摘＞
〇ＳＳＰ制度については、各国と意見交換しながら進めていくことも重要である。

〇究極の安全目標というのは、利用者あるいは現場の人間からいえば、死亡事故ゼロを続けること。システム全体として、絶対に死亡事故は出さないんだという気迫で取り組むのが一番大事じゃないかと思う。